

世界のフラット化と日本の「オリーブの木」

——村上隆「われわれは奇形化した怪物」(前編)——

古 川 裕 朗

(受付 2018年 10月 24日)

1. 問 題 提 起

1989年1月7日、新天皇が即位し、翌日の1月8日、「平成」の時代が始まった。「平成」という元号は、『史記』の「内平(たい)らかに天成る」、あるいは『書経』の「地平(たい)らかに天成る」から作られ、「国の内外にも天地にも平和が達成される」という意味が込められているという¹⁾。

2019年、平成の時代が終わろうとしている。振り返ってみれば、「平成」という時代はその名の通り、世界がフラット化する流れの中で登場した。昭和天皇が崩御し平成の時代が始まった1989年は、ベルリンの壁が崩壊した年でもある。東西の冷戦構造が終結へと向かい、世界は本格的にボーダーレスの時代を歩み出した。旧ソ連圏、東欧、中国など当時の共産主義諸国では市場経済への扉が開かれ、アメリカ発の多国籍企業が世界展開を押し進める。欧州では1993年に欧州連合が発足し、2002年になると共通通貨ユーロの導入も本格的に開始された。ヒト・モノ・カネの自由な移動がグローバルな規模で促進され、移動を阻む壁や溝が取り除かれ、着実に道が平坦にならされてゆく。

こうした世界情勢を説明するものとして、かつて脚光を浴びたのが、トーマス・フリードマンの『レクサスとオリーブの木』²⁾である。“レクサ

1) 「節目の30年 企画「平成時代」スタート」『YOMIURI ONLINE』(2017年11月10日)
http://www.yomiuri.co.jp/topics/ichiran/20171109-OYT8T50002.html?from=ytop_os2

2) Thomas L. Friedman, *The Lexus and the Olive Tree*, newly updated and expanded edition, New York, 2000. 引用箇所は古川の翻訳によるが、訳出の際は次の日本語 ✕

ス”とは、トヨタ自動車の高級車ブランドのことで、当時は海外を中心に展開されていた。世界の経済情勢は合理化や民主化を押し進める方向へと向かっており、フリードマンはそうした「グローバル化経済システム」を指し示す象徴的意味をこの“レクサス”に負わせた。一方、「オリーブの木」は、国家、民族、家族、故郷など、私たちにアイデンティティを与えてくれるもの一般を象徴する。「オリーブの木」は政治的・軍事的な領域において見出されることもあるが、文化的な領域において顕現することもあり、ときに「文化アイデンティティ」という言葉が「オリーブの木」と同義に使われることもある。では、なぜ「オリーブの木」なのかと言えば、中東においてはいまだに故郷の土地のオリーブの木が誰のものであるかを巡って争いがなされていることに由来する。フリードマンの認識では、世界はこうした「レクサス」と「オリーブの木」とが対峙する時代を迎えていた。

そうした中でフリードマンは、冷戦後の世界において国や個人に与えられるべき課題を提示する。すなわち、「アイデンティティや故郷や共同体に対する感覚を保つこととグローバル化システムの中で生き残るために必要な行為をなすこととの間に健全なバランスを見いだす」[42 (上70頁)]という課題である。フリードマンの見通しでは、「レクサス」と「オリーブの木」とが様々に拮抗する中で両者の間に「健全なバランス」が見出され、世界は少しずつしかし確実にフラット化の方向へと進むはずであった。けれども、平成の時代が終わりを告げる今日にあって改めて近年の世界情勢を見渡したとき、必ずしもフリードマンの言葉通りになっているとは言えない。著書の中でフリードマンはグローバル化に抗おうとする「オリーブの木」に対して、たびたび挑発的な言葉をぶつけてきたが、現在グローバ

↙ 訳を参考にした。トーマス・フリードマン（東江一紀／服部清美訳）『レクサスとオリーブの木（上・下）』（草思社、2000年）。引用・参照箇所は本文内に記す。なお、この翻訳書には原文を割愛している箇所があり、引用の際は省略されていた箇所を点線で強調している。

ル化は「オリーブの木」の側からの強い巻き返しにあっていているようにも見える。

例えば、グローバル化に抗う人物としてフリードマンが名指しで批判していたマレーシアのマハティール首相が、高齢にもかかわらず再登板を果たした。同じく名指しで批判されたシリアのハフエズ・アル・アサド大統領は、後継を息子に譲り、そのバッシャール・アル・アサドも内戦を持ちこたえて健在である。同様に当時は強く非難されたインドの核実験であるが、今ではインドの核保有は事実上容認されている状況にあり、イランや北朝鮮の核保有問題がさらなる重大な懸念材料として持ち上がっている。欧州では、ギリシアの財政問題発覚や移民・難民問題の深刻化に伴い、左右双方の急進的政党が躍進を見せる。EU 各国は自国の主権を強調し始め、イギリスは逸早く EU 離脱を決定した。グローバル化の手本であるはずだったアメリカでは、メキシコからの不法移民に対して強い態度を示すトランプ大統領が登場し、イスラエルの米大使館移転問題と共に世界を騒がせ続けている。中国の軍事的台頭に伴い米中両国の緊張が高まるなか、現在ではアメリカが保護貿易的な傾向を強め、米中の貿易戦争も本格化し始めた。トランプ政権からは、ついに中国におけるウイグル人への弾圧を非難する声上がり、言わば民族のフラット化に対して懸念を表明することによって中国当局を揺さぶる動きも出始めた。とりわけサブプライム・ローン問題に端を発した2008年のリーマン・ショックは、一つの事件の影響が一気に世界へと拡大するグローバル化システムの負の面を浮き彫りにし、「レクサス」に対する「オリーブの木」の側からの警戒感を強めたと言える。

「レクサス」と「オリーブの木」との間に「健全なバランス」を模索するという課題を前にして、以上のように近年の世界情勢は「オリーブの木」の側からの抵抗が表面化し、世界はフリードマンの予想通りに動いているとは言い難い。では、視点を我が国に転じたとき、「レクサス」と「オリーブの木」との間のバランスが模索される上で、日本ではグローバル化の流れに対して「オリーブの木」の側からは如何なる応答が示されてきたであ

ろうか？ 本稿の最も大きな問題意識はこの点にある。はたして日本は「レクサス」と健全なバランスを取り得るような「オリーブの木」を自覚し、そうした日本アイデンティティを主体的に提示してきたであろうか？

さしあたって日本の「オリーブの木」と呼べるような動きとして、例えばイギリスの EU 離脱やインドの核実験に匹敵するような政治的・軍事的な動きは存在しない。一方、近年の日本の状況を振り返るなら、ハードパワーではなくソフトパワーの面において日本の「オリーブの木」を見出そうとする傾向があることを誰もが認めるだろう。特に経済産業省が推進するクールジャパン政策にも見られるように、巷ではアニメ・漫画・ゲームなど日本のコンテンツ産業がとりわけ海外の人々にとっていかに大きな評価を受けているかが頻繁に喧伝される。ときにそうしたサブカルチャーが日本の伝統文化を源流に持つことが強調されたりもする。そこで、本稿が取り上げるのは、日本の現代美術アーティスト村上隆による、一連の芸術文化を巡る思想運動である。村上の活動はファイン・アートの領域に留まらず、ルイ・ヴィトンとのコラボレーションなど産業界とのつながりも強く、近年では「ドラえもん」のデザインによってユニクロとのコラボレーションでも話題になっている。

では、なぜ村上隆なのか？ その理由は、いわゆる「オタク文化」と呼ばれる日本のサブカルチャーをハイブローな芸術文化の文脈に置き入れ、日本の芸術文化のアイデンティティを模索する制作活動および言論活動を取りわけ海外において精力的に行ってきたからである。2006年にはこうした活動が評価され、村上は「平成17年度第56回芸術選奨文部科学大臣新人賞（芸術振興部門）」を受賞した。したがって、日本のサブカルチャーを論評したものとして村上の言説は、政治的にも強く権威付けられていることを意味する。加えて、本稿が村上に着目するのは、フリードマンの思想と村上の思想との間に顕著な共通性が見られるからである。1999年に『レクサスとオリーブの木』を刊行した後、フリードマンは2005年に『フラット化する世界』を上梓したが、村上も同じく1999年頃に「スーパーフラット」

というキャッチフレーズを世に送り出し、やはり同じく2005年には「スーパーフラット」三部作を締めくくる最後の展覧会「リトルボーイ」展を開催した。同時期に世界のフラット化を巡る積極的な発言によって社会に一種の流行思想を生み出してきた両者の言説には、符合する点が多い。そこで、20世紀から21世紀にかけて同歩調をとってきた経済文化思想と芸術文化思想とをつなぐ新たな思想史的文脈を形成し分析することが本稿の課題となる。そして、世界がフラット化してゆく時代にあって、その応答として日本の芸術文化が如何なる点にそのアイデンティティを見出そうとしてきたかを明らかにしたい。

上記のような目的を見据え、本稿ではまずフリードマンの「オリーブの木」の概念を考察し、「レクサス」と「オリーブの木」とのバランスが如何なるものであるかを検討した上で、フリードマンの文化進化論的思考を明らかにしてゆく。そして次に、村上隆の「スーパーフラット宣言」が如何なるものであるか、その内実を明らかにしてゆきたい。予め断っておくべきは、「スーパーフラット宣言」が描き出す日本アイデンティティが、極めて辛辣な言葉で綴られているという点である。「スーパーフラット宣言」とは欧米から好奇の目で見られることを自覚した日本人の「怪物宣言」であり、現代のオタク的なサブカルチャーは、原爆投下によって戦後の日本がアメリカの傀儡国家として「不能」になり、日本の人々やその芸術文化が〈突然変異〉を起こして「リトルボーイ」さながら「幼児化」した結果であるというのが、その宣言の主張するところである。しかも、こうした自嘲的思想が文部科学大臣新人賞を受賞することで高度に権威付けられているという現実も直視しておかなくてはならない。それでは、以下、「オリーブの木」の概念を巡る考察から論を進めてゆくことにする。

2. 「オリーブの木」を巡る逆説

根本的で古くからの衝動

冷戦終結以後の「平成」日本において、「レクサス」と健全なバランスを

取り得るような「オリーブの木」が何であったかを検証してゆく前提として、そもそも「オリーブの木」が何を意味し、そして「レクサス」との関係における「健全なバランス」とは如何なるものであるかを、フリードマンの言説に即して改めて確認しておきたい。その上で、はじめに「レクサス」がどのようなものであるかを明瞭にしておく必要がある。フリードマンは「レクサス」を次のように規定している。

レクサスはオリーブの木と同様に根本的で古くからの人間の衝動 (drive) を象徴する。すなわち、生活の維持や進歩向上や繁栄や近代化を求める衝動であり、それは今日のグローバル化システム (globalization system) において実現されている通りである。レクサスは、今日の私たちがより高い生活水準を追求する上で欠かせない急成長するグローバル市場や金融機関やコンピューター技術を象徴する。
[32-33 (上59-60頁)]

「レクサス」は、市場経済やコンピューター技術を基礎に据えた新しいグローバル化システムを象徴する。「レクサス」を特徴付けるキーワードは様々であり、例えば、「近代化 (modernizing)」「合理化 (streamlining)」「標準化 (standardizing)」「均質化 (homogenizing)」「民営化 (privatizing)」「国家横断的 (transnational)」「没個性的 (anonymous)」などがある。こうした特徴は現代特有の新しい現象に他ならない。ところが、フリードマンによれば、そうした「近代化」をはじめとするグローバル化システム推進の動きは、古くからの根本的な人間の「衝動」に基づいているという。このことをフリードマンは、旧約聖書におけるカインとアベルの兄弟物語を例に説明する。

旧約聖書ではカインがアベルを殺すが、その理由は必ずしも明確には述べられていない。そこでフリードマンは「要求 (need)」の概念を軸に三種類の解釈を提示する。第一の理由は女性を巡る性的な「要求」で、カイ

ンとアベルの兄弟は自分たちの母で地球上の唯一の女性であるエヴァを巡って争ったとされる。第二の理由は生活の物質的な向上を求める経済的な「要求」で、不動産を所有するカインと家財や家畜を所有するアベルとの間に財産を巡る争いが生じたとされる。第三の理由は「アイデンティティや共同体の感覚」に関する「要求」で、「自分たちの宗教的・文化的アイデンティティを映し出す寺院」をどこに建ててどちらが管理するか、あるいは「一家の正統性の源泉」をどちらが引き継ぐかで争ったとされる。そして、『レクサスとオリーブの木』が取り扱うのは、第二と第三の要求についてであり、そうした要求がそれぞれ「レクサス」と「オリーブの木」と結びつけられているということになる。[33-34（訳書では割愛）]

「レクサス」とは近代化を求める今日のグローバル化システムのことであるが、それは同時にこうした生活の物質的向上を求める古くからの根本的な「要求」にも基づいている。したがって、コンピューター技術を駆使して世界の市場にアクセスすることは、例えば、水を求めて「井戸まで歩くこと」、「木々を集めてそれを頭の上に載せて5マイルの道を運ぶこと」など [33（上60頁）]、これら旧来の生活維持活動の延長線上にある。すなわち、グローバル化を進める「衝動」とは、欲しいものをより早く、より遠くから、より簡単に、より大量に手に入れようとする原動力として、物質的な向上を求める古くからの根本的要求に連なるものである。こうした「要求」や「衝動」の実現にとって障壁となるもの、例えば、国境・異質性・特有性などのいっさいを取り除こうとする動きが「合理化」や「標準化」といった言葉で呼ばれる。そして、そのような「合理化」や「標準化」を実現するための技術革新やシステム改革を行うことが「近代化」ということになろう。

「オリーブの木」の両義性

それでは、「アイデンティティや共同体の感覚」への要求を象徴する「オリーブの木」が、「レクサス」に対してどのように関係するのかを検証して

ゆきたい。

グローバル化は冷戦システムに取って代わった国際システムであるが、このことを認識したからといって、今日の世界情勢を説明するにあたって人がその説明法を習得する上で必要となるのはこれですべてであろうか？ いや、そうではない。グローバル化は新しいものだ。そして、世界がただマイクロチップと市場だけで成り立っているのなら、おそらくグローバル化に依拠することで、ほとんどすべてのことを説明できるだろう。しかし、残念なことに世界はマイクロチップと市場と男と女から成り、そこにはそれぞれに固有の習慣、伝統、願望、予測のつかない熱望などのいっさいが付随する。だから今日の世界情勢は、インターネットのウェブ・サイトと同じくらい新しいものと、ヨルダン川の両岸に立つ節くれだったオリーブの木と同じくらい古いものとの相互作用としてのみ説明され得る。[29-30 (上56頁)]

ここに提示されているのは、「オリーブの木」についての消極的で相対的な規定である。まず古いものとしての「オリーブの木」は、新しいシステムとしての「グローバル化」、つまり「レクサス」との対置において相対化される。合理化・標準化を押し進めるのがグローバル化システムだが、そうした合理化や標準化を拒み、そこからはみ出すものが世界には存在する。それが例えば、男女の相違であったり、習慣や伝統であったり、願望や野心であったりする。このような合理化や標準化の動きに抗い、不合理で特殊で余剰のものが、「オリーブの木」と呼ばれる。

では、今度は相対的ではなく、もっと積極的な規定を取り上げてみよう。フリードマンによれば、「オリーブの木」は、次のように説明される。

オリーブの木は重要である。それは、私たちをこの世界に根付かせ、錨で固定し、私たちにアイデンティティを与え、私たちの居場所

を定めてくれるものすべてを象徴する。これらが家族や共同体の部類に属するのであれ、部族や民族 (nation)³⁾ や宗教の部類に属するのであれ、あるいはとりわけ故郷 (home) と呼ばれる場所の部類に属するのであれ、みなそうである。オリーブの木なるものは、家族の温もり、独自の存在であることの喜び、私的な儀式に漂う親密さ、個人の関係の奥深さ、ならびに他者に手を差し伸べたり他者と対峙したりする際の自信や安心を私たちに与えてくれる存在である。ときに私たちは、自分たちのオリーブの木を巡って非常に激しく争う (fight)。なぜなら、オリーブの木は自尊心 (self-esteem) や帰属意識 (belonging) といった感情を最高の状態で私たちに提供してくれるからであり、そうした感情は人間の生存にとっては空腹時の食糧と同じくらい不可欠だからである。[31 (上58-59頁)]

フリードマンが指摘しているのは、「オリーブの木」の必要不可欠性と同時にその二面性である。「オリーブの木」は内側に対しては、それがもたらすアイデンティティに伴って「温もり」「喜び」「親密さ」「自信や安心」等を与えてくれる。その一方で、これらが外側からの脅威にさらされる場合、「オリーブの木」はときに著しい怒りを伴って外部と抗争する。

他方、こうした外部との抗争が過度にエスカレートして、「オリーブの木」を守るという目的が見失われる危険性も指摘される。

しかし、オリーブの木が私たちの他ならぬ実存 (being) にとって不可欠である一方で、自身のオリーブの木への愛着が過度になった場

- 3) nation についての日本語訳には常に困難が伴う。文化的・歴史的な共通性を有する人々が主権を有する政治的統一を指向したとき、一般にそうした人々の集団が nation と呼ばれる。だから、nation には文化的・歴史的な意味と政治的な意味の両方が含まれている。本稿では前者の意味が主なテーマになるので原則としては「民族」という訳語を採用するが、そこには主権を有した政治的共同体を指向するものとして、「国民」という意味合いも含み込ませている。

合、それは私たちを他者の排除に基づいた鉄のアイデンティティ、鉄の絆、鉄の共同体へと至らしめることがある。そして、そういった妄信がドイツのナチスや日本の残忍なカルト集団オウム真理教やユーゴスラビアのセルビア人のように実際に暴れ狂う場合、この妄信は他者を根絶やしにすることへと至る。[32 (上59頁)]

「オリーブの木」を巡る抗争は、「オリーブの木」の良い在り方と悪い在り方の二種類に類別される。「オリーブの木」の良い在り方は内側の「温もり」「喜び」「親密さ」「自信と安心」等を、あるいは「自尊心や帰属意識」を保持するために他と争う。これに対して「オリーブの木」の悪い在り方においては、目的と手段が混乱をきたす。そこでは、他者の「排除」が結果として生じるのではなく、むしろ「排除」することそれ自体が目的化され、また自らを守るための手段であった抗争が言わば戦いそのものを目的とした闘争へと変質し、他者を「根絶やし」にしようとする。

注意しなければならないのは、「オリーブの木」における内部の安寧と外部との抗争という対立するものが二者択一的に与えられるわけではなく、一体的に、それゆえ両義的に与えられる点である。「温もり」「喜び」「親密さ」「自信と安心」等をもたらししてくれる「オリーブの木」の存在が脅かされるなら、私たちは激しい怒りでもってそれに応える。「オリーブの木」が外部の勢力によって奪われそうになるなら、たとえ内側の安寧を犠牲にしても戦おうとする。「オリーブの木」が良い在り方をするのであれ、悪い在り方をするのであれ、そうした両義性が存在するという点において違いはない。フリードマンは述べる。「人々はアイデンティティや故郷のために命を捨て、殺し合い、歌を歌い、詩を作り、小説を書く。なぜなら、故郷の感覚や帰属意識を欠くなら、不毛で根無しの人生になるからだ。根無し草のような人生など、決して人生ではない」[32 (上59頁)]。不毛な人生を送るくらいなら、ときに人は人生そのものを失うことも躊躇しない。私たちは文化的アイデンティティを守るためなら野蛮に振る舞うことを辞さず、

またそうした野蛮な振る舞いが文化的な表現行為の表現対象にもなり得る。そういった文化と野蛮の逆説がここには存在している。

「究極のオリーブの木」としての民族国家

そして、そのような内部の安寧と外部との抗争という「オリーブの木」特有の逆説を最もよく体现するのが、フリードマンによれば「民族国家」に他ならない。

実際、民族国家（nation-state）がたとえ弱まることはあっても決して無くなろうとしないこと理由は、民族国家こそが言語的にも地理的にも歴史的にも究極のオリーブの木だからであり、私たちが属す人々の究極的表現だからである。人は単独で完全な人間になることはできない。人は裕福な人間になることなら単独でできる。人は賢い人間になることなら単独でできる。しかし、人は単独で完全な人間になることはできない。というのも、人はオリーブの木立の一部であり、その中に根付いていなければならないからである。[31（訳書では割愛）]

フリードマンによれば、民族国家は「オリーブの木」の究極形態であり、言語や領土や歴史といった同じ「オリーブの木」を共有する人々の生み出す究極的表現である。フリードマンにおいて人間の現実存在は個として成立しているのではなく、常に社会的なものとして与えられている。こうした民族国家は、合理化や標準化を推し進めるグローバル化システムにとっては、それに抗う最大の余剰物となる。かつての冷戦時代であれば、「オリーブの木」に脅威を与えるのは別の「オリーブの木」であった。すなわち、民族国家に最も敵対するのは別の民族国家であった。しかし、冷戦後の世界においては「レクサス」が「オリーブの木」にとっての、つまりは民族国家にとっての脅威であるとされる。

とはいえ、フリードマンはそうした「レクサス」と「オリーブの木」と

の争いの中で、「レクサス」にとって民族国家が必要不可欠であることも説いている。フリードマンは「国のアイデンティティ」が「レクサス」にとって重要であることを次のように語る。

今日、経済的な繁栄を欲するなら、どんな社会であれ絶えずよりよいレクサスを作ろうと努め、それを世界へと送り込み続けなくてはならない。しかし、単にグローバル経済に参加するだけで社会が健全になるなどというどんな錯覚も抱くべきではない。もしグローバル経済に参加することで、国（country）のアイデンティティが犠牲になるなら、もし個人がグローバル・システムによって自分のオリーブの木の根を踏みつぶされたと感じたり、押し流されたと感じたりするようなら、そうしたオリーブの木の根は反乱を起こすだろう。それらは蜂起して、その進行を妨げるだろう。それゆえ、グローバル化がシステムとして生き残れるかどうかは、ある程度は、私たちがみないかにうまくそれらの間にバランスを見出せるかどうかにかかっている。健全なオリーブの木を欠いた国は、世界に対して完全に開かれて世界の中へと枝を伸ばしてゆく上で、十分に根付いていると感じたり、安全であると感じたりすることはないだろう。しかし、単にオリーブの木に過ぎず、ただ根を張るだけでレクサスを持たない国は、決してそれほど遠くまで進み行くことも成長することもないだろう。バランスの中で両者を保つことは、絶え間ない努力なのである。[42（上70－71頁）]

「国（country）」と「民族国家（nation-state）」との違いをここで先鋭化することは、あまり意味をなさない。それを踏まえて「国」という「オリーブの木」がグローバル化社会の中にあってもなお重要であることの理由を確認するなら、第一に国のアイデンティティが「レクサス」によって必要以上に抑圧されると、国が「レクサス」に対して逆襲するからである。フリードマンは述べる。「アイデンティティや故郷の感覚をはぎ取られ

ることほど人を怒らせることは、そうあるものではない」[32（上59頁）]。このことは「オリーブの木」を巡る逆説の一つとしてすでに述べたことでもある。そして、第二に「国」という「オリーブの木」は「レクサス」が世界に行き渡る上での足場であり、それぞれの国がしっかりとその土地に根を張っていないのであれば、そもそもグローバル化が達成され得ないからである。ここにも「オリーブの木」を巡る逆説が存在し、「国」という「オリーブの木」は確かにグローバル化にとって障害になるが、かといって完全に「国」がアイデンティティを失うならグローバル化は達成され得ない。したがって、「レクサス」と「オリーブの木」とが、あるいは「レクサス」と民族国家とが互いに「バランス」を取り得るとすれば、フリードマンも絶え間ない努力が必要であると指摘しているように、それは抗争と逆説との極めて複雑な関係の上に成立しているということになる。

3. 「レクサス」と「オリーブの木」とのバランス

ハードパワーとソフトパワー

それでは、フリードマンが考える「レクサス」と「オリーブの木」との「バランス」、あるいは「レクサス」と「民族国家」との「バランス」は、具体的にどのようなものであろうか？ フリードマンは両者の関係を様々な事例を通じて描き出している。

「レクサス」と「オリーブの木」が最も健全なバランスを保っている例として取り上げられるのは、アマゾンの熱帯雨林に暮らすブラジル先住民民族カヤボ・インディアン・のケースである。かつてカヤボ族は、自分たちの土地とライフスタイルを、言わば別の「オリーブの木」に植え替えようとする外部の勢力からただ武力というハードパワーのみによって守ってきた。本来であれば、「レクサス」という新しいグローバリズムの流れも、アマゾンの環境を破壊する存在として敵対勢力になり得たはずである。ところが、近年のカヤボ族は、世界中の科学者、自然保護主義者、ビジネスマンたちと協力して、つまりはソフトパワーによって、自分たちの土地とライフ

タイルを守ろうとする。例えば、カヤボ族は、自分たちが所有する金鉱山を業者に掘らせることで採掘料を徴収し、この利益をアマゾン川流域の環境を守るために使用する。しかも、衛星放送のビジネス専用チャンネルで金の相場を確認しながら、そうしたビジネスを有利に行うという。このようにハードパワーからソフトパワーへのシフトチェンジを通じて、いわばウィン・ウィンの関係とも言うべき「レクサス」と「オリーブの木」との幸運なバランスが確かにここには存在している。[36 (上62-63頁)]

しかしながら、そのような恵まれたバランスと同種のことを政治的・軍事的な主権を有した国家に対して求めることは難しい。国家における「レクサス」と「オリーブの木」とのバランスを理解するには、そのようなソフトパワーとハードパワーとの素朴な対立図式を単純に当てはめるわけにはいかない。フリードマン自身が著書『レクサスとオリーブの木』の中でも「一番のお気に入り」と前置きしつつ取り上げているのは、ソフトパワーとハードパワー、安寧と抗争とが逆説的に絡み合うイスラエル国家の複雑な現状である。それは、フリードマンの友人であるイスラエルの或る大学教員が、路上にモバイル・コンピューターを入れたブリーフケースを置き忘れてしまい、それが数分後には不審物として銃によって破壊処理されてしまったというエピソードである。あらゆる情報を詰め込んだコンピューターを失ったことにより、このイスラエル人教師は、知人の連絡先や今後2年間の予定などあらゆる情報を失ってしまった。彼はその後も自分への戒めとして穴のあいたブリーフケースを使い続け、国防軍に属している者も多い彼の受講生たちがこれを見ると、すぐに事態を理解して笑い出すという。[42-43 (上71-72頁)]

このエピソードから見えてくるのは、「オリーブの木」を巡る数々の不合理な両義性である。イスラエルという民族国家は自身の「オリーブの木」を巡って今もパレスチナという別の「オリーブの木」と争っている。このような抗争は自身のアイデンティティや心の安寧を守るための行動でありながら、同時にテロの可能性を自らに呼び込む逆説的な行為でもある。イ

イスラエルの人々は、たとえどんな危険に曝されようとも決して「オリーブの木」を手放そうとはしない。

他方で、モバイル・コンピューターはグローバル化社会の象徴的存在として、「レクサス」の側に属するものである。これによって人々は世界とグローバルにつながる事が可能になる。しかし、世界と自由につながる事ができるからこそ、モバイル・コンピューターは逆に世界のどこからでもイスラエルに対するテロ攻撃を可能にする。「オリーブの木」同士の抗争の中では、「レクサス」それ自体がその逆説性の中に巻き込まれて諸刃の剣となる。「オリーブの木」対「オリーブの木」という旧来の争いが、実は「レクサス」の媒介によって増幅させられたと言ってもよい。だから、イスラエルの戦いは「オリーブの木」同士の戦いであると同時に「レクサス」との戦いでもある。

ソフトパワーとハードパワーの対立図式もここではそう単純ではなく、あらゆる情報を詰め込まれたモバイル・コンピューターが破壊処理され、それが大きな痛手になったということは、情報それ自体への攻撃が有効な闘争手段になり得るということを暗示する。もし情報やその伝達網に対してテロ攻撃がなされるなら、容易に社会は機能不全に陥る。ソフトパワーの根元をわずかなハードパワーによって物理的に刈り取るだけで、社会に大きな打撃を与えることができるのである。だから、効率性という観点から捉えるなら、グローバル化社会にあってはむしろハードパワーの有効性が以前よりも高まる可能性が存在することも認めなければならない。「レクサス」の側の攻撃手段はソフトパワーに限られないのであって、「レクサス」と「オリーブの木」の対立図式がそのままソフトパワーとハードパワーの対立図式にあてはまるわけではない。

しかも、このような困難の中にありながら、イスラエルでは「オリーブの木」がもたらす喜びも失われてはいない。穴のあいたブリーフケースは外部との抗争の厳しさを物語るが、それは同時に笑いを引き起こし、親密な雰囲気の中で共同体を自覚するという喜びを象徴する。この点において

もやはり安寧と抗争の逆説が存在していると言わねばならない。

核武装 vs 「レクサス」

さらにフリードマンは、国家という「オリーブの木」と「レクサス」とのバランスが中長期的なスパンにおいて保たれる場合があることも指摘する。「オリーブの木」と国家とが抗争・牽制し合うことによって結果的にバランスが保たれるケースである。1998年、各国の反対を押しきってインドは核実験を行った。フリードマンによれば、これは「オリーブの木を守ろうという衝動 (impulse)」の強い表れに他ならない。インドが核実験を行ったのはインドがアメリカと中国から最も欲しがっていたもの、つまり「尊敬 (respect)」を勝ち取るためであり、核という究極のハードパワーは自分たちに「道路や電気や水」よりも大事な「自尊心 (self-respect)」を与えてくれるとインドの国民は考えたという。[37-38 (上63-65頁)]

しかし、フリードマンによれば、「今日のグローバル化システムでこのようなことが起こるなら、隠れたところで長期にわたる代償が発生する」。なぜなら、ムーディーズやスタンダード・アンド・プアーズなどの大手格付け機関が、インドに対するアメリカからの制裁措置を考慮して経済等級を格下げし、フリードマンが「電脳集団 (Electronic Herd)」と呼ぶところの投資家たちが資金を引き上げてしまうからである。これによって、インドはこれまでよりも高い金利を支払わねばならなくなり、国際市場からの資金調達に難が生じて、高く登った「オリーブの木から降りる道を模索」せざるを得なくなるという。このように、中長期的な視点においては、「レクサス」のソフトパワーが「オリーブの木」のハードパワーを押さえ込むケースが指摘されるのである。[38-40 (上65-66頁)]

この種の出来事は、さらに「黄金の拘束服」というキー概念によっても特徴付けられる。フリードマンによれば、国家がそうした「電脳集団」に忌避されることなくグローバル化社会に参加をして繁栄を望むなら、グローバル化システムの「諸ルール (rules)」を遵守しなければならない。

ここには自由と不自由との逆説が存在する。このルールがどのようなものであるかを端的に特徴付けるなら、「経済が成長し、政治が縮小する」[105 (上143頁)] こと、つまり国家的・国民的な主権の制限である。より具体的に述べるなら、グローバル化システムのルールとは、例えば、民営化、規制緩和、外国資本に対する門戸開放、経済的な選択と競争の促進、インフレの抑制と物価の安定化、官僚体制の縮小、財政健全化、関税の引き下げ、輸出の拡大などを総合したものであり、フリードマンはこれら複数の「黄金律 (golden rules)」が編み上げられたものを「黄金の拘束服 (the Golden Straitjacket)」と名付けた [105 (上142頁)]。そして、「黄金の拘束服」という標準服着用の規則に違反していないかどうかを嗅ぎ回るのが種々の格付け機関であり、これをフリードマンは「ブラッドハウンド (bloodhound)」[110 (上148頁)]、つまり「警察犬」と呼ぶのである。インドの核保有について言えば、インドが「黄金の拘束服」を着ていられないような状況を自ら作り出したことをフリードマンは批判していたと考えてよい。

以上のように、フリードマンにおいては、「電腦集団と民族国家と黄金の拘束服との相互作用がグローバル化システムの中心に位置する」[110 (上148頁)]。「レクサス」と「オリーブの木」とのバランスとは、結局のところ主要なものとしては、これら三者の力関係のバランスに他ならない。そうした中で改めて強調しておくべきなのは、「レクサス」の側にとって最も大きな余剰物が「民族国家」であり、かつ国家の主権行使としての核武装であると、フリードマンが認識している点である。彼によれば、民族国家の「自尊心」として「オリーブの木」が最も強く顕在化された形は、核武装である。しかし、「オリーブの木」の顕現としての内戦は許容されても、核武装はバランスを崩すものとして許されない。こういったフリードマンの論調から読み取り得ることは、グローバル化社会における核武装の位置づけである。「レクサス」とのバランスにおいて「オリーブの木」がどこまで顕在化することが許容されるのか、その臨界点が核兵器による武装可能

性の有無という点に示されているのである。

「グローカル化」と文化進化論

フリードマンにおいては、「オリーブの木」の究極形態が民族国家であり、「オリーブの木」への衝動が最高潮に体现されたものが国家の核武装であった。しかし、究極のハードパワーによるそうした「オリーブの木」の発露の仕方は、「レクサス」と「オリーブの木」とのバランスが求められるグローバル化社会の中ではなかなかその可能性を見出すことが難しい。ではソフトパワーにおいてはどうかというと、やはりハードパワーと同様のことが指摘される。フリードマンによれば、自分たちの文化が破壊されることを恐れ、他国の文化に対して高い壁を築いたとしても、やがては電腦集団によって崩されてしまい、結果的に自分たちの文化アイデンティティを失ってしまうという。そこで求められるのが、やはり「レクサス」と「オリーブの木」との間にバランスを見出すことである。その際、フリードマンが重要視するのは、文化の「グローカル化 (glocalization)」である。

私は健全なグローカル化を次のような文化の能力として定義する。すなわち、ある文化が他の強力な文化に遭遇したとき、自身の文化に自然に馴染んでこれを豊かにしてくれるようなときはその影響を吸収し、それが真に異質なものである場合は食い止め、そして違いがあるにもかかわらず違うものとして享受され賛美され得るものを選び分ける、という能力である。[295 (下72頁)]

「グローバル」と「ローカル」を合わせたこの「グローカル」という造語は、私たちの文化がグローバル化に直面したとき、「レクサス」と「オリーブの木」とのバランスの取り方を指南する。「健全なグローカル化」がどのようなものかと言えば、そこでは自分たちの核となる文化アイデンティティを失わないことを前提に、他の文化に対する応答の仕方が三種類に分

けて提示される。すなわち、自身の文化に親和的でかつ有益なものを吸収すること、真に異質なものの侵入を食い止めること、そして異質なものを異質なものとして享受・賛美することの三点が主張される。

他方、不健全なグローカル化については次のように述べられる。

グローカル化が不健全になるのは、人が自身の文化の一部ではなく自身の文化に潜在するものと全く関係していないものを吸収しているのに、自身の文化を認識することができなくなっているのです、それが自身の文化に潜在するものと関係していると人が考えるときである。

[297（下75頁）]

フリードマンが具体的な例として挙げているのは日本におけるマクドナルドの受容である。マクドナルドが本来は日本発祥のものでないことは誰もが知っている。ところが、マクドナルドを日本発祥のものと考えていた或る子供の例をフリードマンは取り上げ、それを不健全なグローカル化であると指摘する。自身の文化アイデンティティがどのようなものであるかを見失ってしまったため、吸収されたものが自身の文化に源泉を持たないにもかかわらず、それが自身の文化特有のものとして誤認されることが、グローカル化の不健全な在り方だというのである。これをフリードマンは、自身の恩師でラビ教義の律法学者ツヴィ・マルクスが使用した癌ウィルスの比喩によっても説明している。マルクスによれば、癌細胞は「偽装する (disguise)」ことによって知らぬ間に健康な細胞に侵入し、いつしか体全体を乗っ取ってしまう [297（下75頁）]。これと同じように、グローバリズム化の中で「偽装」した異質な文化が入り込んで、いつの間にかオリジナルな文化が乗っ取られてしまう危険性が指摘されるのである。だからこそ、私たちは、自身の文化が如何なるものであるかをよく認識し、文化が「偽装」されたものかそうでないかを見分ける「健全なグローカル化」の能力が必要とされる。

しかしながら、一方においてフリードマンは、ある文化的特質が本当は後から吸収されたもので外部に由来するにもかかわらず、人はそうした経緯を忘れても構わないとも主張する。こうした齟齬についてはどのように理解したらよいだろうか？ フリードマンはツヴィ・マルクスの言葉を引用しつつ、「健全な吸収」について次のように語る。

「健全な吸収の証となるのは、社会が何かしらを外部から取り込み、それを自分自身のものとして採用し、自身の基準の枠組みに合うよう改修して、それがかつて外部から来たことを忘れる場合である。このようなことが生じるのは、自身の文化の中に潜在するがおそらく十分には発展させられていない何かにその吸収された外部の力が接触し、この外部の刺激との出会いがその潜在するものを実際に豊かにして、それが繁栄するのを助けるときである。」これが種や文化の進展(advance)の仕方である。[295 (下73頁)]

具体的な例として取り上げられているのは、ユダヤ人によるギリシア文化との接触である。かつてユダヤ人がギリシア文化と遭遇したとき、ギリシア人の論理学が吸収され、ユダヤ人の聖書やラビの教義に融合された。すでにユダヤ文化の中にはギリシア人の論理学と親和性を有する潜在的特質が存在していたのであって、これがギリシア文化との遭遇によって触発されて発展し、やがて聖書やラビの教義として結実したのである。この場合、聖書やラビ教義の中のどの部分がギリシア文化に由来するのかをことさら突き止めようとしてもそれは不可能であり、また意味をなさない。というのも、かつて吸収されたギリシア文化は、ユダヤ文化の中で一体化され、ユダヤ文化そのものとして成熟してしまっているからである。これに対し、ギリシア文化には肉体美を眺め賞讃する文化があったが、ユダヤ人はこれを異質なものととして全く受け入れなかった。他方、ギリシアの食文化に関してはこれを異質なものとしつつも享受の対象にしたことが指摘さ

れる。[295（下73頁）]

したがって、吸収された文化的特質が外部に由来するということを忘却してはいけない場合と忘却しても構わない場合との違いは、端的にその吸収されたものが本来的に自身の文化にとって異質であったかそうでなかったかによる。そして、そのためには自身の文化の特質を理解しておく必要があり、自身の文化にとって異質であるかそうでないかを見分ける力が結局のところ「グローカル化」の「能力」ということになる。

ではこのような発想がどこから来たかという点、それに答えるためにはフリードマンが「種や文化の進展」と述べている点が重要である。「グローカル化」を推奨するフリードマンの思考の根底には、広い意味における社会進化論、つまり生物学的進化論の文明・文化への応用がある。生物が基本的に種の独自性を守ろうとしながらも、他の個体との交配や様々な外部の環境の変化に対応しつつ、そうした外部からの影響に触発されながら自らの在り方も漸進的に変化させてゆく。変化を遂げた種にとって、どこまでが純粋な種の独自性であるのかを過去に遡って厳密に規定しようとしてもそれは意味をなさない。吸収された外部の文化的特質を場合によっては忘却しても構わないと述べているのは、このような生物学的な進化論のイメージをアナログカルに文化の進展に対しても適応しているからである。グローカル化の議論は、一種の文化進化論に他ならないのである。

グローカル化の未来

とはいうものの、生物学的進化論を文化文明に適用する社会進化論や社会ダーウィニズムは、実を言うと歴史的に見て一般に評判が良いとは言えない。なぜなら、ダーウィンの進化論を決定論的な弱肉強食論と解して社会変革に利用したのが、かのナチズムであったからである。フリードマン自身も、著書の中で19世紀から20世紀初頭にかけての放埒な資本主義体制を「ダーウィン主義者的な残忍さ」[103（上139頁）]と表現し、否定的な意味に用いている。もちろんダーウィンの進化論が、そうした弱肉強食論

と本質的な関係を有しているわけではない。

興味深いのは、そうした放埒な資本主義体制が生じた時期をフリードマンが第一のグローバル化の時代と位置づけている点である。冷戦後に始まったのは、第二のグローバル化の時代ということになり、だから、フリードマンはグローバル化それ自体に一種の進歩や発展段階を認めていると言える。それゆえに、このグローバル化の動きが丁度良い所で平衡状態に達するというのを、どうやらフリードマンは考えていないようである。確かに文化の「グローカル化」とは、「レクサス」と「オリーブの木」との間に如何にバランスを見出すかという課題に対し、ソフトパワーの観点からなされた一つの解答であった。しかし、こうした動きはグローバル化それ自体が進歩する中で一定の理想的状態に留まることはなく、グローカル化の行き過ぎというさらなる問題が立ち上がってくることもまた指摘されるようになる。

私たちは世界のあらゆる文化をそのままに保存することを望むことはできない。また文化が自らを保存しようとする内的な意志や結束を欠くなら、私たちは文化が保存されることを欲することもできない。種がそうであるように、文化が子孫を残し、進化し、そして滅びることは、進化 (evolution) の一部である。しかし、グローバル化のせいで今日起きていることは、超速進化 (turbo-evolution) である。それは、ほとんど不当と言ってもよい。壁の無い世界においては、非常に強健な文化でさえ電脳集団の力には全く敵わないこともある。文化は生き残るために助けを必要としている。さもなければ、文化が進化によって再生され得るよりもずっと速いペースで文化は破壊されてしまうだろうし、しまいには動物園にただ一種類の動物しかいないという結果にもなるだろう。[303 (下84頁)]

フリードマンが懸念するのは、未来における文化の均質化ないし単一化

である。生物の種と同じように文化は進化する。主体的に進化を受け入れなければ、文化は生き残ることができない。かといって古い世代が減びることもまた進化の一部である。しかし、ここで問題になっているのは単なる進化ではなく「超速進化」である。進化のペースが速すぎて、つまりグローバル化のペースが速すぎて、文化が次の新しい世代へと引き継がれる間もなく破壊されてしまい、その結果、世界の文化が均質化・単一化してしまうのである。

こうした懸念の根底には、フリードマンの宗教的な世界観が存在していることに注意しなくてはならない。『レクサスとオリーブの木』をフリードマンが旧約聖書のカインとアベルの物語で始めたように、今度はバベルの塔の話でこの著書を結びへと導く。今日のグローバリストたちが夢見るのは「同じ言語」「同じ通貨」「同じ会計慣行」、いわゆるワン・ワールドの世の中である。フリードマンによれば、こうした願望を抱く人々はまさに旧約聖書におけるバベルの塔の建設を夢見た人々に等しい。そして、これを可能にしたのは人々の「同一性 (sameness)」だった。そこでフリードマンは、なぜ神がバベルの塔を建設する人々の言葉をバラバラにし、互いに協力し合えなくして塔の建設を止めさせたかについて問題提起をする。

[472 (下264頁)]

フリードマンはその解答をツヴィ・マルクスの言葉の中に求めている。その要点は二つある。第一に、バベルの塔の建設は人間の限界を越えようとする行為であり神への挑戦であると、神が感じたから。第二に、普遍的な言語や計画は人間の特殊性を否定し非人間的であると、神が感じたから。これら二つの解答は連動している。人間が普遍的世界の構築を計画することは人間の分を越えた不遜な行いであり、また人間が人間であるためには特殊な存在であることを引き受けなくてはならない。ではそのために神は何をしたか？ フリードマンは述べる。

自分たちのオリーブの木との関わりやバランスに人々を引き戻すこと

が神のやり方だった。このオリーブの木は自分たち自身の個性を映し出し、また場所・共同体・文化・部族・家族への特別な結びつきを映し出すのである。[473 (下265頁)]

人間を「オリーブの木」に結び付けることは神の意志である。だから、「オリーブの木」を捨てて完全に均質化・単一化した一つの世界に至るというイデオロギーは、神の否定に他ならなかった。こうしてフリードマンは、人間と「オリーブの木」との関係がいかに重要であるかを著書の締めくくりにおいて宗教的な世界観からも強調する。そうして最終的にフリードマンは、グローバル化がもたらしたインターネット上の結びつきは本当の結びつきではなく、「サイバーコミュニティが現実のコミュニティに取って代わる」[473 (下266頁)] ことはないと結論付けるのであった。

しかしながら、フリードマンのインターネット・コミュニティに対する考え方が、数年後の著書『フラット化する世界』のアップデート版においては、大きく変更されていることを付け加えておかななくてはならない。フリードマンによれば、『レクサスとオリーブの木』が上梓された20世紀末から『フラット化する世界』が上梓された21世紀初頭にかけては、さらなる世界の均質化・単一化が進み、世界は「グローバル化のフラット化段階(flattening phase)」へと移行したという。確かにこうした世界のグローバル化が、世界のアメリカ化という側面を有していることは否定できない。しかし、インターネット上に様々な文化コンテンツを「アップローディング」できるようになったことによって、世界はむしろ多様化が進んだともフリードマンは主張する。ローカルな文化がグローバルに広がることこそが、本来の意味におけるグローバル化であるという。そうした中で、特に彼はアニメ産業の可能性に注目する。というのも各地の文化を反映させたアニメ・コンテンツを作り、インターネットによって世界中に売り込むことができるからである。フリードマンはこうした状況をビザに喩え、グローバル化の未来は、言わばフラットなインターネット上のビザ生地の上

に様々な文化で味付けを行う世の中であると主張するのである⁴⁾。

以上のように、本来は民族国家や核武装との強い結びつきを持っていた「オリーブの木」の概念であるが、それが「レクサス」とのバランスを模索するなかで最終的に行き着いたところの一つは、アニメ等のコンテンツ産業の推奨であった。ユダヤ・キリスト教的な世界観や文化進化論などの壮大な思想的背景を踏まえて展開されたフリードマンのグローカル化論は、思いのほか矮小なフラット化論へと先細りしてしまったように見えてもならない。しかしながら、視点を我が国に転じたとき、そうしたフリードマンのグローカル化論ないしフラット化論は、日本における「オリーブの木」が何であるかを検討する上で大きな意味を持つ。というのもフリードマンの議論は「日本は世界の未来かもしれない」と主張する村上隆の「スーパーフラット」論とよく符合するからである。次節では、日本において「レクサス」との健全なバランスを取り得るものとして如何なる「オリーブの木」が模索されていったかを念頭に置きつつ、村上の「スーパーフラット宣言」の本質がどのようなものであるかを明らかにしてゆきたい。

4. 村上隆「スーパーフラット宣言」

小泉構造改革

まず村上の「スーパーフラット」論がどのような社会的思潮の中で発信されていたかを確認しておく必要がある。我が国の高度な政治レベルにおいて、グローバル化の流れが最も早く明瞭に打ち出されたのは、21世紀初頭の小泉内閣においてであろう。「聖域なき構造改革」を唱えて様々な規制緩和を行い、言わば日本国のボーダーレス化とフラット化を推し進めた小泉内閣は、第百五十三回国会における総理大臣所信表明演説（2001年9月27日）において、次のような発言を行っている。

4) Cf. Thomas L. Friedman, *The World is Flat, A Brief History of the Twenty-first Century*, further updated and expanded, New York, 2007, pp. 477–488.

いよいよ、改革は本番を迎えます。我が国は、黒船の到来から近代国家へ、戦後の荒廃から復興へと、見事に危機をチャンスに変えました。これは、変化を恐れず、果敢に国づくりに取り組んだ国民の努力の賜物であります。私は、変化を受け入れ、新しい時代に挑戦する勇氣こそ、日本の発展の原動力であると確信しています。進化論を唱えたダーウィンは、「この世に生き残る生き物は、最も力の強いものか。そうではない。最も頭のいいものか。そうでもない。それは、変化に対応できる生き物だ」という考えを示したと言われています。

私たちは、今、戦後長く続いた経済発展の中では経験したことのないデフレなど、新しい形の経済現象に直面しています。日本経済の再生は、世界に対する我が国の責務でもあります。現在の厳しい状況を、新たな成長のチャンスと捉え、「改革なくして成長なし」の精神で、新しい未来を切り開いていこうではありませんか⁵⁾。

この演説は、ダーウィンの進化論に言及している点で、フリードマンの議論とよく符合する。グローバル化の波が押し寄せて来る中で、小泉演説が強調するのは「変化」である。生き残るために必要なのは、フリードマンが「ダーウィン主義者的な残忍さ」と呼んだような屈強さでも狡猾さでもない。むしろ必要なのは、新たな環境に対応するため自らを「変化」させてゆく能力である。こうした「変化」こそが本来のダーウィンの主張であるとされる。小泉演説が「最も力の強いもの」や「最も頭のいいもの」にあえて言及していたのは、かつてダーウィンの進化論が弱肉強食論と解された歴史上の出来事を暗に踏まえていたからだと言える。もちろん「変化」こそがダーウィン進化論の本質であるという考えには首をかしげざるを得ないが、小泉演説がかつての社会ダーウィニズムを批判的に修正・受

5) 首相官邸ホームページ「第百五十三回国会における小泉内閣総理大臣所信表明演説」<http://www.kantei.go.jp/jp/koizumispeech/2001/0927syosin.html>（閲覧2018年9月30日）。

容しようとしている点はフリードマンと共通している。

このように小泉演説における「変化」がダーウィンの進化論と結びつけられて語られていることを鑑みるなら、グローバル化の時代に必要な「変化」とは、すなわち「進化」のことを指していると理解してよい。あるいは、「進化」においてもやはり「変化」することを強調しているのだとすれば、これを〈突然変異〉と呼んでも構わないだろう。よって、小泉演説のキャッチフレーズの一つであった「改革なくして成長なし」の「成長」は、単なる経済成長にとどまらず「新たな成長」として、日本社会の「進化」ないし〈突然変異〉といったイメージを帯びていたと見なすことができる。

そうして、この小泉内閣の末期において、「平成17年度第56回芸術選奨文部科学大臣新人賞（芸術振興部門）」（2006年）を受賞したのが、実は現代美術のアーティスト村上隆であった。その際の贈賞理由は次の通りである。

村上隆氏は、フランスの高級ブランドの意匠、都市開発の宣伝、食玩、GEISAI など、芸術を越境し続けた活動を国際的に展開してきた。平成17年にニューヨークで開催された展覧会「リトルボーイ」（ジャパン・ソサエティ、4月～7月）は、彼の表現のルーツであるアニメーションなどの日本のポップカルチャーやサブカルチャーを、海外の解釈によりそうのではなく、日本人自身の視点を意識的に明示しながら体系的に紹介した意欲的な試みであった。また、同展のために作られたカタログは、村上氏が評論の卓越した言語をも持つことを示した刺激的な論考である⁶⁾。

着目すべきは、村上の受賞部門が「美術」ではなく、「芸術振興」という部門であった点である。贈賞理由を見ると、特にニューヨークのジャパ

6) 国立国会図書館インターネット資料収集保存事業（WARP）の資料を利用した（<http://warp.da.ndl.go.jp>）。

ン・ソサエティ・ギャラリーで開催された「リトルボーイ」展が取り上げられ、アニメを初めとする日本のポップカルチャーやサブカルチャーを日本人自身の視点から解釈し、それを展覧会カタログの中で言語化したことが大きな評価の対象となっている。では、村上によるそうした評論の内実は如何なるものであるだろうか？ 奇しくも村上の美術理論は小泉構造改革と大いに符合するところがあり、以下のその点も合わせて村上の美術思想を探ってゆきたい。

「幼児化した不能の文化」

2005年に開催された「リトルボーイ (Little Boy)」展は、自ら展示企画を手がけた村上自身のキュレーション展である。そのコンセプトの全容は展覧会カタログ『リトルボーイ 爆発する日本のサブカルチャー・アート』⁷⁾に収められている。翌年の2006年、村上はキュレーターとしての仕事が評価され、国際美術批評家連盟 (AICA) の米国支部から「アイカ・アワーズ」のベスト展覧会賞を贈られることにもなった。この「リトルボーイ」展は、いわゆるスーパーフラット・プロジェクト・トリロジー (三部作) の一つに数えられる [『リトルボーイ』151頁]。その一つ目は、2000年から2001年にかけて日米を巡回した「スーパーフラット (SUPERFLAT)」展に伴って刊行された単行本『SUPERFLAT』(2000年)である。二つ目は、2002年にパリのカルティエ現代美術財団で開催された「ぬりえ (Coloriage)」展である。そして、この2005年の「リトルボーイ」展が三部作の最終章に位置づけられる。

「スーパーフラット」概念の起源は90年代後半に遡るが、この概念が初めて定式化されたのは、2000年に刊行された『SUPERFLAT』の「Super Flat

7) 村上隆 (編著)『リトルボーイ 爆発する日本のサブカルチャー・アート』ジャパン・ソサエティ／イエール大学出版、2005年。以下、引用・参照箇所については書名と共に頁数を本文中に記す。なお本書は英語と日本語が対訳の形で併記されており、引用の際も必要に応じて英語を併記する。

宣言」においてである⁸⁾。今日、一般に「スーパーフラット」の概念は、表立っては美術を初めとする日本の諸文化の造形上の特徴を言い表した言葉として位置づけられる⁹⁾。伝統的な日本絵画は西洋の遠近法的な空間とは異なり、奥行きを欠いた平板で余白の多い画面構成を有していた。こうした特徴は現在のアニメや漫画などにも見られる日本文化固有の美意識であり、現代のオタク文化等のサブカルチャーは正統で伝統的な日本美術史の末流に位置づけられ得るのだという。伝統的な芸術文化と現代サブカルチャーとのボーダーレス、すなわち“ハイブロー（高尚）”と“ロウボブロー（低俗）”とのボーダーレスによって新しいフラットな日本美術史を考案したのが、「スーパーフラット」概念の意義の一つとされる。

しかしながら、「リトルボーイ」展において提起された「スーパーフラット」概念は、そうした造形上の問題に留まらない。この概念は、戦後日本の政治社会状況全般を俯瞰する日本文化論へと進展を見せている。ここでまとまった量を引用しておきたい。

1945年8月6日、人類史上初、兵器の原子爆弾愛称「Little Boy」が広島島の街の上で炸裂した。続いて9日長崎に二発目の原子爆弾愛称「Fatman」が投下され合計21万人が死んだ。（後遺症を含めると37万人とも言われている）。原爆の破裂破壊惨劇ホワイトアウト！の後は焼け野原。荒野、そしてまた荒野。まっさら更地。真っ白な光の後にはオレンジ色の炎…の後に真っ黒な瓦礫肉体大破が一瞬に現実にも身に降り掛かった。

直後日本は無条件降伏し、15年におよぶ太平洋戦争が終結した。

8) 村上隆（編著）『SUPERFLAT』マドラ出版株式会社、2000年、4頁。

9) 例えば、インターネット上の「現代美術用語辞典 1.0」(<http://artscape.jp/dictionary/modern/>)の「スーパーフラット」の項目を参照せよ。

2005年。戦後60年。現代の日本、平和だ。

しかし日本に住み暮らす者は気づいている。どこかおかしい事を。だが気にする程の事も無い。幼女を切り刻み、義援金の山をばらまき、ボランティアのカタルシスを人生の糧にして、経済成長の正義のため報道規制をも辞さないメディアの面構え。適度に心地いいワンルームマンションの玄関口には無意味な SECOM（民間警備会社）のお守りステッカー。安全安心、ヒステリー。

日本は世界の未来かもしれない。そして、日本のいまは Superflat。

社会も風俗も芸術も文化も、すべてが超二次元的。

かわいい文化は血肉となって全てに蔓延し、子供のままでいる事になんの躊躇も無く、アンチエイジングの感覚は心だけでなく体をも統制出来うると、国を挙げての葛藤中だ。

ジョージ・オーウェルが書いた小説『1984』のような統制されたSF的ユートピア社会。居心地が良く、ハッピーでおしゃれで、そして差別の気持ちもほぼ無き世界。正義の座標軸ってもんは自分の「気持ちいい」と同義語だってしか理解出来ない輩の生きる空間。

資本主義の名の下、アメリカの傀儡政権が完全完成した後に来た平板な形骸としての国家。その空虚の坩堝の中で生きる人間たちが繰り広げる、言葉では割り切れない堂々巡り。その謎を解くために、画像や歌、もしくはなにがしかの表現行為を媒介にして、コンピューターにスクリーンするように一枚ずつのウィンドウを立ち上げて、それらウィンドウを一気に結合した瞬間に見えた風景の中にある一片の魂の所在、それらを手がかりに未来の世界を少しだけ引き寄せてみよう。

「かわいい」「へたれ」「ゆるい」キャラクターたちが生氣無くっこり笑いかけるとき、無表情に見つめるとき、世界の人々は融解してゆく幸福な心に気がつくはずだ。元よりあった日本人の画像感覚、美

意識が、戦後、変形加速して、今ある形に固着した。その中に、未来を予見出来る種を見つける事が出来るはずだ。

子供の喧嘩の時に相手を揶揄するように名付けられた原子爆弾の愛称そのままに、我ら日本人は「Little Boy」=「ちっちゃな子供」そのままだ。[『リトルボーイ』100-101頁]

村上の言葉は非常に辛辣である。まず彼が指摘しているのは、日本社会に生じている様々な領域でのボーダーレスなフラット化である。例えば、アンチエイジングにおける「老い」と「若さ」のボーダーレス。経済的豊かさの追求に伴う「正義」と「快感」のボーダーレス。アメリカの傀儡国家日本としての「統制」と「安全安心」のボーダーレス。これら様々なボーダーレスが「空虚の坩堝」となって日本社会全体をフラット化する。そして、それらを根源的に包括するボーダーレスとして指摘されるのが「大人」と「子供」のボーダーレスである。

原爆投下の直後に降伏した日本は、ある種のトラウマを抱えることになる。村上によれば、憲法9条のもと日本国家が戦力を奪われてアメリカの軍事力の庇護下に入ることになった結果、主体性を喪失し「他者依存」する「心理構造」が日本人の中に作られてしまったという[『リトルボーイ』22頁]。その結果生み出されたのが、「かわいい」「へたれ」「ゆるい」という言葉によって形容されるアニメや漫画のキャラクターたちであり、あるいは日本全国の自治体に溢れる着ぐるみ人形等のキャラクターたちであった。だから、現在のオタク文化が生じた原因の一つは、半世紀以上前の原爆投下に由来するというのが村上の主張である。彼はそうした状況を、「ゆるキャラ」と呼ばれる着ぐるみ人形に即して次のように厳しくかつ自嘲的に論評する。

加えて「かわいい」から「ゆるい」にいたるまでの変遷には性的不能状態、つまりインポな気分が大いに反映していると言えよう。見て

いる人が脱力してしまう、ゆるキャラたちには、ドラマチックなお話しは無い。あるのはご都合主義の設定のみ。泡沫なイベントのために受けた生命。みんな平和ボケした顔をしている。ゆるキャラは日本人なのだ。何もかもが一瞬で吹き飛び、その後の傀儡下の無根拠な国家基盤の下、幼児化した不能な文化が力を帯びてくる。思春期の子供より以前、幼児のままで停止してしまっている文化。この土壌をして、かわいくゆるいキャラクターたちが生まれてくるのだ。[『リトルボーイ』 137-138頁]

村上によれば、ゆるキャラは戦後の日本人そのものに他ならず、そうした日本人が生み出したサブカルチャーを彼は「幼児化した不能な文化」と位置づける。「リトルボーイ」という展覧会の名称は、原爆の呼称“Little Boy”とこれによって生み出された「幼児」としての日本人の両方の意味を掛け合わせたものに他ならなかった。

「我々は奇形化した怪物」

戦後の日本人やそのオタク的文化が幼児的であったとはいえ、それが単に未熟さを意味するかと言えば、そうではない。というのも先の引用にもあるように、日本のオタク的幼児文化は「元よりあった日本人の画像感覚、美意識が、戦後、変形加速」して出来たものだからである。そこには、フリードマンや小泉構造改革にも通ずる村上の文化進化論的な世界観が存在している。

進化発展ばかりが夢じゃない。ミューテーション (mutation) を繰り返した果てに、奇形化した醜態をぶらさげて、顔に醜い傷があっても、それらは生きる意味を持つ。醜い文化であっても生きて来た意味を、未来に伝えたい。[『リトルボーイ』 149頁]

村上にとって、「幼児化した不能の文化」とは、単に未成熟を意味しているのではなく、「ミューテーション」、つまり〈突然変異〉の結果であった。日本文化がもともと備えていたフラットな造形特徴が、進化発展する過程の中で原爆に遭遇してフリードマンが言うように「超速進化」し、〈突然変異〉を被って奇形化したというが、村上の主張するオタク的幼児文化の真意だったのである。

村上のこうした日本人観ないし日本文化観は、たびたび村上と活動を共にしてきた美術評論家、榎木野衣の理論的補強によってさらなる確信へと導かれる。村上が『リトルボーイ』の中で紹介している榎木の個人メールでは、2000年の「スーパーフラット宣言」における「フラット」概念と1922年に採択された全国水平社の「水平社宣言」における「水平」概念との相似性が指摘される[『リトルボーイ』160頁]。そして、榎木は「被差別民」の有する誇るべき「技芸の民」「芸能の民」としてのイメージに現代日本文化の担い手のイメージを重ね合わせることによって、これを次のように日本と欧米のヒエラルキー問題へとスライドさせる。

これになぞらえて言うなら、村上さんの「スーパーフラット宣言」もまた、「日本人にも欧米人なみのハイアートが可能なのだ」という、ただ権利的な観点から芸術を語るのではなく、「欧米のアートから差別され『怪物』扱いされて来たサブカルチャーであることを誇り得る時が来たのだ」という、価値転換の次元から世界芸術を再構築しようとしている点にあると思います。

もっとも、これはひとつまちがえれば、一種の裏返しナショナリズムにつながりかねないわけですが、その心配はないでしょう。なぜなら、ハイアートやナショナリズムの根幹にある「人間」という観念そのものが、実は近代人そのものがあらかじめ一種の「怪物(monster)」であり「サイボーグ」であることを隠すための、一種の人工的な概念であったことは、昨今の世界状況を見るかぎり、もはや

あきらかであり、ほかでもない「スーパーフラット宣言」は、そうした人間概念への批判へと向けて、発せられていると考えるからです。そして芸術とは元来、人の生きる日常そのものを相対化してしまう、それら「魔物 (demons)」の手によるものです。その意味では芸術と人間は根本的に対立しています。そのため近代社会は両者を懸命に融和しようとして来ましたが、そこにはもともと無理があったわけです。いまはもう、「人間」以前からいた「怪物 (monsters)」たちの手に芸術を返すべき時が来ていると思います。原爆という人間概念をはるかに超越した根源的出来事は、はからずもそのことをあきらかにしてしまったのではないか。もしそうだとしたら、それこそが、西洋文明にとって最大の「パンドラの匣」であったというべきでしょう。そして戦後日本は、まさしくこの匣の中で生まれました。

その意味で、僕らにいま必要なのは、いまある芸術を芸術たらしめた近代の「人間宣言」に変わる、まったく新しい存在謳歌のための高らかな宣言を、ここパンドラの匣の底にある極東の島々のグチャグチャなカオスのようなジャンクのなかからつくりあげることであって、その意味で「スーパーフラット」とは、21世紀を切り開くための新しい「脱人間宣言」の扉を叩くものなんじゃないか、と感じたのです。これを読んでなぜだか元気が出て来るのは、それが高貴な材料からではなく、日々日本であてどなく輩出されている膨大な量の無意味で雑多なジャンクだけを原材料として作り出されているからなのかもしれません。(2005年2月8日付の榎木野衣氏のメールより) [『リトルボーイ』160-161頁]

榎木の言説の主要な論点は、次のように4点に整理することができる。第一に、「高貴」な欧米のアートと「ジャンク」な日本のサブカルチャーとの間に横たわるハイとロウのヒエラルキーを逆手に取ることによって、日本文化の価値の相対的な独自性を強調すること。第二に、もともと「怪物」

であったところに思想的改造を施した「サイボーグ」というのが原爆投下を実行し得た近代人の正体であり、それゆえ欧米の芸術文化やナショナリズムの根幹をなす近代的な「人間」の概念は、その正体を隠すための人工的な概念装置に過ぎなかったということ。第三に、本来、芸術なるものは「怪物」たちの側に属するものであるがゆえに近代的な「人間」の概念との融和は矛盾を抱え続けてきたが、その矛盾が原爆投下によって明らかになってきた今、芸術を「怪物」たちのもとに返す歴史的段階にようやく辿り着いたということ。第四に、「スーパーフラット宣言」は「脱人間宣言」に他ならず、「怪物」へと回帰した戦後日本人にとっての新しい存在謳歌の在り方であり、その意味において戦後日本人のサブカルチャーは21世紀の世界を切り開く先駆けになり得るということ。

こうした樫木の論点補充を受けて最終的に村上は、「スーパーフラット宣言」を「われわれは奇形化した怪物」という日本人の「怪物宣言」として位置づけ直すのである。

われわれは奇形化した怪物。「人間」である欧米人から見れば、「人間以下」の被差別民だった。

樫木氏のメールで私は改めて確信した。Superflat プロジェクトはわれわれの「怪物宣言」であり、いまこそ、怪物ゆえの芸術であることを誇りうる時が来たのだと。[『リトルボーイ』 161頁]

次稿に続く